芸術系大学出身者と労働

喜始　照宣
（東京大学大学院）

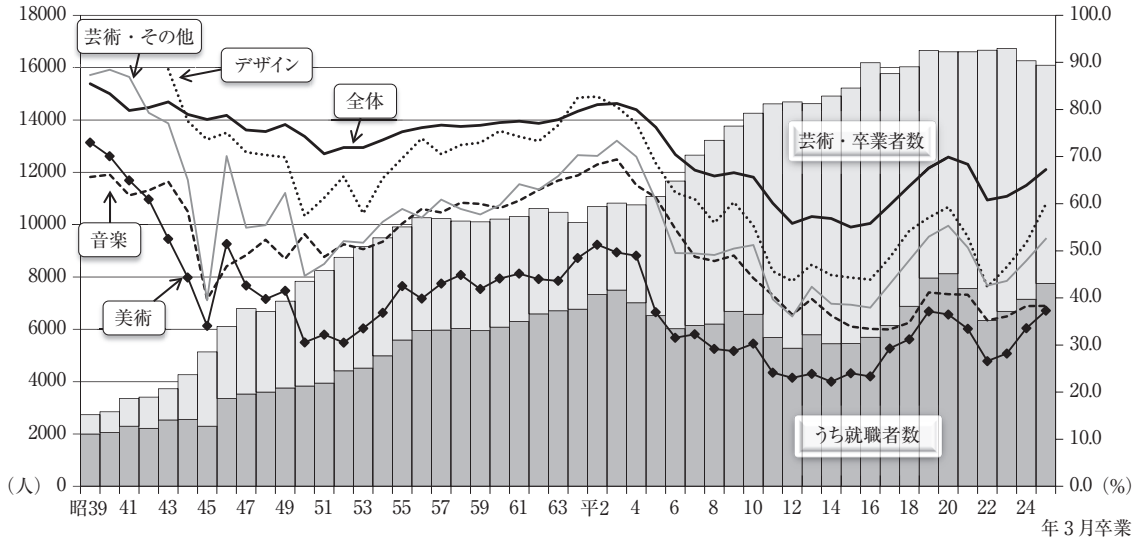
本稿では，芸術系大学出身の「芸術家」と労働について論じる。芸術系大学がこれまで数多の優れた芸術家を輩出してきたことを考えるならば，芸術家と労働の関係を語る上で，芸術系大学から（芸術に広く関連する）職業への移行は重要な切り口となるだろう。なお，本稿では，これまで筆者が中心的に調査してきた美術系大学（特に美術系学科）[1] とその出身者である作家[2] について，主に扱っている。また，おそらく多くの読者の方々にとって，芸術系大学の様子や芸術家の生活は想像し難いものであるだろうと考え，芸術家に関する文献レビューよりも，具体的なデータや事例の紹介を重視した内容とした。以下，前半部では，芸術系大学の学生の卒業後進路について，後半部では，美術系大学出身の女性画家を事例に，芸術家の生活と労働について，述べる。

Ⅰ　芸術系大学生の卒業後進路

1　芸術系大学と就職：50 年間での推移

芸術系大学の学生は，卒業後どのような進路を歩むのだろうか。まずその点を確認しておこう。過去 50 年間での，芸術関係学科における就職者数及び就職者率（就職者数/卒業者数）の推移を示したのが，図 1 である。いくつか例外年はあるが，芸術系，特に美術系学科での就職者率は，大学卒業者全体と比べて，一貫して低いまま推移していることがわかる。ただし，芸術系学科において，進路未決定や就業意欲が低い学生が特段に多いという訳ではない。なぜなら，芸術系学科の場合，大学院等進学者（10％程度）や，次項で見るような芸術家/フリーランスでの活動を希望する者の割合は高いし，さらに非就職者の中には，希望した仕事に就いたが，それが正規雇用ではなかった者や，正社員登用を前提に非正規雇用で働き始める者等も多く含まれると考えられるからである。例えば，小規模のデザイン事務所やアトリエ系設計事務所の場合，最初は正社員ではなくアルバイトという雇用形態で入職し，その後正社員登用される者も多いという[3]。また，そうした小規模企業の場合，採用人数は少なく求人募集は不定期のため，大学卒業後に就職を決める学生や，他職を経験後，転職する学生も少なくない。そのため，学卒直後の就職者率だけに注目しては，芸術系大学生の実際は見えにくいのである。

図 1　芸術関係学科における就職者数及び就職者率の 50 年間での推移[4]



2　なぜ「美術」では就職者が少ないのか：作家志望の存在

他方，芸術系卒業者のうち，芸術家を志す者はどの程度いるのか。ここでは美術系学科の作家志望者に限定して見ていこう。『学校基本調査』からはその数を把握できないため，卒業者に占める作家（志望者）数を計上している多摩美術大学のデータ[5]を参考にする。図２に示したように，男女で傾向に違いはあるが，美術系学科（絵画，彫刻，工芸）の学部卒業者のうち，どの年度でも２割前後の学生が作家（志望）として卒業している。大学院での作家志望の卒業者も30％台であることから，現在，作家での活動を希望する学部卒業者は全体の３割程度であると推測される。この割合が多いか少ないかの判断は難しいが，このように作家志望者がある程度のインパクトを持っていることは，美術系学科における就職者の一貫した少なさを理解する上で見逃せない。また，作家志望であることと就職が結びつきにくい背景として，制作活動継続のためなら就職も１つの選択肢として想定する作家志望の学生がいる一方で，特に選抜度の高い美術系学科では，「就職」を「制作の休止・趣味化」とする独特な意味づけがあり，自ら作家でもある実技系教員や強く作家志望の学生から就職に対する抵抗感の言明がなされる場合もあることが指摘されている[6]。

3　美大における学生の変化：就職不安とフリーランス志望の高まり[7]

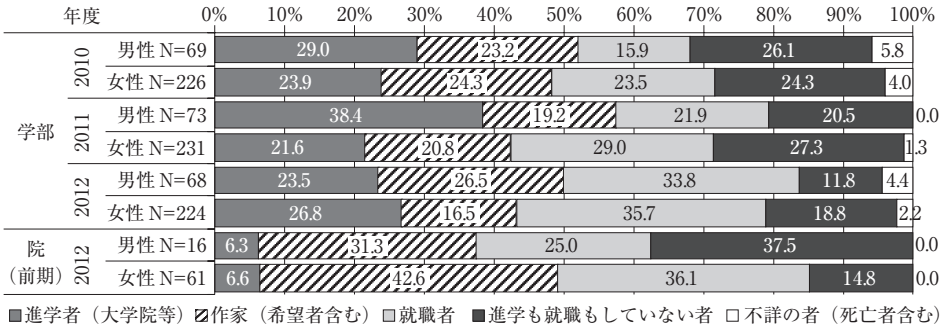
こうした作家志向の土壌たる学生文化は，大手広告代理店やデザイン事務所等への就職志向が根強いデザイン系との違いであり，美術系学科の特徴とも言えよう。しかし，近年，（少なくともいくつかの）美大ではこれに変化が生じている。ひとつが，フリーランス志望，特にイラストレーターの仕事を希望する女子学生の多さであり，デザイン系でも「デザイナーになる」ではなく「絵が描きたい」を理由に入学する学生が増加傾向にある。だが，従来から作家やフリーランス志望者への支援は主に実技系教員に任されていたため，就職課は新たなニーズの高まりに応じた支援の方向性を模索している。そして，もうひとつが，作家志望の減少と就職希望の増加である。この背景には，保護者の就職に対する不安を伴った関心の高まりがあり，就職とは縁遠いと思われる美術系学科の人気低下が近年目立っている。これによって作家志向の文化が衰微するとは思われないが，強く作家にこだわらず，広く美術に関連する分野での就職を志望する学生の割合は，今後も次第に高まっていくだろうと予想される。こうした状況の下，教員も実技面でのサポートだけでなく，学生への「就職」指導も重要な仕事の１つとして，積極的に取り組む必要性を感じており，職員と教員の連携による学生のキャリア支援の充実が，美大ではこれまで以上に課題となっている。

Ⅱ　芸術家の生活と労働：女性画家Ａを事例に

では，大学卒業後，作家（志望）の若者たちは，どのように生活と制作を両立するのか。以下では，美大出身の女性画家Ａさん[8]を事例に，芸術家の生活と労働を検討する[9]。

Ａさんは，1974年生まれ。自営小売業を営む両親のもと，４人きょうだいの３番目として，神奈川県に育った。家族に芸術が職業の者はいないが，芸事好きで，「わりと芸術に寛容な環境」だったという。また，叔母が画家で絵画教室を開いており，幼少期からきょうだいでそこに通っていた。美大に進むことを決めたのは高校２年の時で，同年から美術系予備校に通い始めた。現役での入学は叶わなかったが，１浪の後，都内の美術大学・油絵科に進学した。将来作家でやっていきたいという気持ちは，美大進学を決めた時点では朧気にあったが，大学の４年間を通じて自らの興味の

図２　多摩美術大学・美術系学科の卒業後進路状況



方向やものの考え方を探っていく中で徐々に高まっていった。進路に関して親から就職すべきと助言は受けたが，就職しようとは考えず，また家庭の金銭的な問題から大学院進学は早期に断念していたため，卒業後はアルバイト等をしながら制作を続けることを選んだ。また当時は，絵画の学生や教員の間で就職や他の道についての会話はおそらくほとんどなされておらず，作家志望ではなくても建前上そう言わざるをえないか，そうでない場合は黙ってしまうような雰囲気があったようである。ちなみに，現在，A さんの大学時代の同級生で作家活動を続けているのは彼女の知る限りで 1 割程度（十数人），その他映画監督や漫画家になった者もいる。だが作家のみで生活している者はほぼおらず，他職との兼業が多い。また，作家を途中で断念した場合，制作の傍ら従事していたデザイン関連職に就いた者が多いのではないかという。

さて，A さんはどのように制作活動を継続させてきたのか。以下，継続に必要となる【場所】【資金】【発表機会】の獲得の観点から，彼女の生活と労働について見ていこう。

まず，表現形式にも拠るが，作品を作るためには【場所】，すなわちアトリエが必要となる。A さんの場合，卒業直後は実家に戻り生活をし，外に安アパート等を借り制作していた。その 2 年後，26 歳の時に，ちょうど大学院を卒業したばかりの友人たちから共同アトリエを借りないかという誘いを受け，実家を出て，彼女らと一緒に古い大きな工場を一から改装しそこで制作を続けた。だが，僅か数年のうちに友人たちは海外に留学することになり，また生活していたアパートも経年劣化で取り壊しが決まったため，それを機に 28 歳で実家近くに住居を移した。広めのボロアパートを借り，そこをアトリエ兼家とした。しかし，思った以上に制作と仕事（デパート販売員）の両立は厳しく，「若さで少しは頑張れましたけど，年齢とともに疲れがたまり，制作する時間が減っていきました。食費を減らすようになり，結局両立が出来ず 20 代終わりに体を壊しました」と，A さんは語る。そのため 29 歳で泣く泣く実家に戻ることになった。4 畳半の自室で場所を取らない小品を作っていった。実家で休養した後は正社員（後述）として就職し，30 歳の時，再び外にアトリエを設けた。その後，30 代半ばで結婚。現在は夫の地元（地方都市）の持家で義母と 3 人で暮らしており，居間とキッチンをアトリエとして使わせてもらっている。ちなみに，夫は会社員であるが，休日に社会福祉関連のイベントをしていることもあって，お互いの活動は尊重しており，活動しやすい環境だという。このように，彼女は，1 つのアトリエを拠点にしていたのではなく，その時々の状況に応じ，様々な場所を渡り歩いている。

つぎに，生活や制作のための【資金】は，どのように獲得しているのか。芸術活動のみで生計を立てている芸術家はごく少数であり，多くの者が芸術とは関係ない複数の仕事に就くことでリスクを軽減させている（アビング 2007）。A さんもその例外ではなく，作家以外の仕事の収入の方が間違いなく多かったという。また，彼女によると，作品の売れ行きは景気によって左右され波があり，個展の機会が増えた 30 代でも年間数十万円程度だったようだ。なお，A さんはギャラリーの所属作家でないが，ギャラリー[10] で展示の場合は，作品価格をギャラリストと相談し決め，売り上げの半分が彼女の手元に入ってくる。

それでは A さんの副業はどうであったか。彼女の仕事遍歴を見てみよう。以下，主な仕事だけを列記しても，20 代では，PC 周辺機器の実演販売と請負作業及び事務（派遣社員，週 4 日，1 年半），コンタクトレンズの箱詰め，ティッシュ配り，PC の実演販売，クレジットカードの入会促進（日雇い，不定期，1 年），カラオケ店のアルバイト（週 4 日，数カ月），デパートの洋服販売（派遣社員，週 5 日，4 年）と様々である。その後は，前述のように体を壊してしまい 29 歳で実家に戻ったが，それが恥ずかしく自立したいと思ったことから，休養後はテレオペレーターのアルバイト（週 5 日，数カ月）を経て，同年に正社員（賃貸管理業務）として就職。そこで 5 年間働いた。ところが 34 歳の頃，個展の誘いが増え，制作との両立が厳しくなったため思い切って離職し，作家だけの生活を試みることにした。しかし，年数十万の売り上げだけの生活は当然厳しく，貯金も減っていった。そのため 36 歳で美術館監視員（アルバイト，週 3 日，1 年半）の仕事に就き再就職を計画していたが，その矢先，急遽結婚が決定。現在は主婦の傍ら制作を続けている。ただし，夫婦でお互いの活動資金は自ら稼ぐと決めており，夫の給料から制作費を貰うことはない。

このように，A さんは作家を続けていくために多種多様な就業形態・職種の仕事に従事していた。しかし，これら副業からの収入は決して充分ではなく，住まいのアパートとアトリエの家賃を払うだけで精一杯だったという。なお，仕事選びには基準があり，制作時間や個展開催の可能性を考慮して，長期休暇が取れそうな仕事や比較的離職しやすい仕事を選んでいたという。その背景には「作家活動が軌道にのればいいな」という期待と「ちゃんとした仕事につくと制作が

出来なくなってしまうかな」という不安があった。

最後に，作品を披露し，芸術の世界での存在感を維持するための【発表機会】はどのように得られるのか。A さんの初めての個展は 30 歳の時で，レンタルギャラリーでの展示だった。スタートとしては遅いが，そこは企画展示も行うギャラリーで，その後何度も個展やグループ展の機会を与えてもらっている。そのギャラリー以外でも，A さんは国内外を問わず展示をし，アートフェア等にも出展経験があるが，その紹介経路は，ギャラリストやアートディレクター，展示に来た観客，そして雑誌の掲載作品を見た読者による紹介等，様々だという。最近は個展に来た若い作家からグループ展参加を誘われる機会も増えている。このように聞くと，展示機会は連鎖的に自然と獲得されるようにも思われる。だが，「作品が良ければ誰かがドアをノックしてくれる，応援してくれる」訳ではないと A さんは語る。彼女も学生時代はそう思っていたが，実際は人柄やプレゼンテーション能力，そしてツテが大きく，人との付き合いが苦手だと語る A さんは大学時代の人間関係を生かし切れていないという。さらに，大学時代にポートフォリオ[11] 作成等，「自分自身を見せるという術」を鍛えておらず，アート業界の仕組みも理解しないまま卒業したため，大学で作家としての基礎的・実践的知識を学ぶ必要があったと，当時を反省的に振り返っている。

Ⅲ　おわりに

以上，芸術系大学の学生の卒業後進路を概観し，美大出身の画家の生活と労働について見てきた。今後更なる事例を積み重ね分析し議論する必要はあるが，本稿を通じて，（特に若手の）芸術家が芸術活動を継続させていく上で，芸術以外の労働は重要な役割を持つこと，そして芸術系大学出身者の場合，芸術家としての歩みを考える上で，大学時代の経験からの影響は等閑視できないことを示唆できたのではないかと考える。ただし，芸術の世界には，芸術家以外にも，多様なアクターがいる。彼らの労働にも目を向けていく必要がある。例えば，アートプロジェクトや文化事業に関わる様々な人々の労働に，インタビューをもとに迫った吉澤の仕事（2011a；2012）が貴重であり，それは創造の現場に関わるスタッフの多くが「有期雇用の「その年暮らし」で，長時間労働かつ低賃金，雇用保障や社会保障とは縁遠い就労形態と生活を送っている」（吉澤 2011b：205）ことを明らかにしている。また，『日本労働研究雑誌』（2006 年 4 月号）の特集「芸術と労働」も幅広い対象をカバーしており参考になる。興味のある方はぜひそちらも読んでみていただきたい。

1）美術系大学（美大）には，美術系以外にも，デザイン系やその他（芸術学，映像，写真等）の学科がある。現在，音楽系も含む芸術関係学科の学生数は約 7 万人（大学生全体の 2.7％），うち美術系の学生が約 1.1 万人（全体の 0.42％），デザイン系の学生が約 1.6 万人（全体の 0.6％）である（『平成 25 年度学校基本調査』）。なお，教員養成課程は今回の対象に含まない。
2）美術分野に限定して論じる場合は，芸術作品の制作を行う者を「作家」と呼称する。
3）A 美術大学・就職課職員へのインタビュー［2013 年 2 月 22 日］
4）『学校基本調査』より作成。
5）大学 HP（http://www.tamabi.ac.jp/prof/disclosure/admission-statistic2.htm）より作成。
6）喜始照宣（2012）「美術系大学生による卒業後進路選択と大学文化との関連性」日本高等教育学会第 15 回大会発表資料。
7）本項は主に B 美術大学・元就職課職員へのインタビュー［2013 年 10 月 17 日］，及び C 美術大学・デザイン系教員へのメール・インタビュー［2014 年 1 月 18 日］に基づく。
8）A さんへのインタビューは，2013 年 11 月～ 2014 年 1 月にかけて，メールにて実施した。
9）『平成 22 年国勢調査』（抽出詳細集計）によると，「彫刻家，画家，工芸美術家」は約 3.1 万人で，うち 41.0％が女性である。「デザイナー」の約 18 万人と比べると，かなり少数である。
10）ギャラリー（画廊）とは美術作品の展示施設であり，その経営者をギャラリストと呼ぶ。民間の商業ギャラリーは，契約アーティストの作品の展示・販売等を行う企画画廊とレンタルスペースである貸し画廊に大別され，後者は「日本独自のシステム」と言われる（暮沢 2009）。
11）自身の過去の作品等をまとめた冊子。デザイン職等の採用活動でも重視される傾向にある。

参考文献

アビング，H.（山本和弘訳）（2007）『金と芸術――なぜアーティストは貧乏なのか』grambooks.
暮沢剛巳（2009）『現代美術のキーワード100』筑摩書房.
吉澤弥生（2011a）『若い芸術家たちの労働』「アートプロジェクトの事例に見る芸術労働の社会学的研究」調査報告書.
―――（2011b）『芸術は社会を変えるか？――文化生産の社会学からの接近』青弓社.
―――（2012）『続・若い芸術家たちの労働』「文化芸術の公共性と社会的コンフリクトの研究」調査報告書.

きし・あきのり　東京大学大学院教育学研究科博士課程。最近の主な論文に「美術系大学生と予備校――大学生活における現役/浪人の差異に着目して」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第52巻，137-146頁，2013年。教育社会学専攻。